

Windows 用ゲーム

都市伝説



妄想設定資料集 01

Prologue

十日間のインド旅行。

帰国を決めた夜、それまでやけに親切にしてくれた宿のおばちゃんの言葉が全ての始まりだった。

「どうだい、アキラ。最後にいい思い出していく気はないかい？」

「日本へのいい土産になるよ」

何となく想像はついた俺は、微かな不安はあったけど、それでも大きな期待を胸にして頷いた。

そして紹介されたのは、おばちゃんの娘の三姉妹。

「どの娘にする？」

おばちゃんに促されるまま、一番仲の良かった末の娘を選んで夢のような一夜を共に過ごした。

そして次の日。

インド最後の朝、少女からかけられた言葉は。

「おはようございます、ご主人様」

そんな衝撃的な言葉だった。

「……つまりアンタは文字通りその娘を『買った』と」

「いや、道理で相場より高いなあと思ったんだよ」

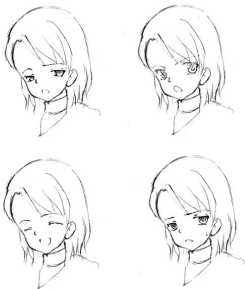
「で、覚悟は決まった？」

「お手柔らかにお願いします」

俺と沙織とインドから来た少女と、そしてその周囲の人たちを巻き込んだ騒々しい毎日は。

「インドまで飛んでいけーっ！」

沙織のメガトンパンチで幕を開けた。



「そんな金があるなら、
溜まってる家賃払えって一の」

晃の幼なじみで周囲からは晃と公認扱いされてるんだけど、意地っ張りなので素直になれない暴力系ツンデレ娘。

アパートの大家をやっているのは姉であって沙織が家賃を回収する必要はないし、そもそも大家である姉も晃から家賃を取る気はないんだけど、晃とのコミュニケーションの一環なのでやめません。

周囲のほとんどの人の共通認識は「もうくつついちゃえよお前ら」

ツンデレ幼なじみ

鹿島 沙織

Saori Kashima

身長 : 165cm
 体重 : 49.8kg
 誕生日 : 8月21日
 3サイズ : 80/52/81
 好きな物 : 料理、スポーツ
 嫌いな物 : 幽霊、お化け、
 変な衣装
 所属 : 成城大学2年
 都市伝説研究会





本作メインヒロイン、力の1号こと鹿島沙織さんです。
コンセプトは「都市伝説と関係ない王道ヒロイン」です。姉はカシマレイコですが。

スポーツ万能で、得意技は黄金の右腕から繰り出される一撃必倒な拳技。OPで兎がサオリを買ってきたのを知って、殴り飛ばすために生まれたと言っても過言ではなかったり。

まあ兎とは実際のところどうなのよと言うと、実はやることはやっちゃってるし相性がいいのはお互いも認めてるんだけど、どうしてかくつかないという。その理由についてはシナリオ後半で。

ちなみに料理をはじめとして家事全般は得意なので、将来はいい奥さんになると思います。

なのにスタッフ内では人気がない。不憫だ。

プロポーションだっていいんです。姉が凄すぎるだけで。不憫だ。スポーツ万能で体動かすのも好きなのに、都市伝説研なんてマイナー極まりないサークルに入ってるのが一番不憫なのかもしれない。

「しかしあれだな。インド人の少女にトイレの花子さんにマッドガッサー。君はなんかそういう人たちにばかり側にいて好かれるな」
「名前だけこじつけじゃねえかとか好かれてるかどうかはともかく、それじゃあ沙織はどうなるんですか？」

鯨島さんが何の前触れもなくぼそっとワケのわからないことを言い出したが、いつものことなので何事でもなかったかのように言い返す。

しかしそんな俺の反論など予想済みだったかといわんばかりに、アメリカ人っぽく肩をすくめて——うわ、超むかつく——鯨島さんは言葉を続けた。

「ツンデレ幼なじみなんて都市伝説クラスの存在だと思うのだからどうかね」

「誰がツンデレですか誰が！」

「今はツンだな」

「沙織がデレりますかねえ」

「キサマもなに真剣に討議しているか！」

沙織が騒ぐが、鯨島さんが動くことはない。そうするとどうなるかという、そんなことは決まっている。

「今までデレたことはないのかね」

「そうですね、デレたという小さい頃は——」

「何はざいてるかキサマはっ！」

そして予想通り沙織のショートアッパーで宙を舞う。

都市伝説研に置いてごくりふれた日常である。

その日の夜、鹿島家沙織の自宅にて。

「何がデレりますかねえ」よ」

そう言って枕にパンチする。

「まあ確かに最近強く当たったかもしれないけどそれは」

そう、アイツが突然旅行に——しかも何も言わずにインドなんかまで行ってしまい、しかも戻ってきたと思ったらサオリちゃん連れてたし、しかも一緒に住むとか言い出すし。

まあそれはしょうがないかと思ったら今度は花子や蜜香さんとも妙に仲良くなるし——

「そうよねえ。突然ライバルがあんなに増えちゃ、沙織も大変だねえ」

「そうそ……って姉さん！？」

「はい、お姉ちゃんですよー」

「いや『ですよー』じゃなくて突然なにをって言うかごめんの部屋！」

「だって沙織ったらドア閉めずにぼそぼそと面白そうなこと言って——」

「今『面白そう』って言ったでしょ！」

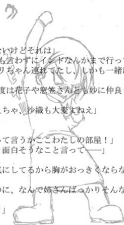
「まったく。そうやって細かいことばかり気にしてるから胸がおっさくららないのよ？」

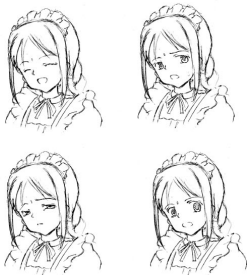
「うるさいって言うか同じ親から生まれたのに、なんで姉さんばっかりそんなに無駄に胸が！」

「ドラえもんやドラミちゃんの逆パターン？」

「くさー！」

こっちは鹿島家に置いてごくりふれた日常である。





「おはようございます、
ご主人様」

インドで兄に文字通り『買われた』少女。

親に『売られた』ことは理解してるけれど別に親と決別したとかではなく、兄の家族になったという感覚。基本的にポジティブなのでホームシックになったりしないけど、そのうち里帰りはしたいなと思う程度。

日本語は堪能なんだけど、日本の常識には疎かったりするので割と大変なことになったりすることもある。主に兄が。

インド人の少女

サオリ

Saori

身長 : 150cm
 体重 : 39kg
 誕生日 : 10月18日
 3サイズ : 77/54/79
 好きな物 : 料理、洗濯、掃除
 嫌いな物 : 他人の不幸、
 争い、犬
 所属 : 都市伝説研究会、
 北路家





本作メインヒロインその2、技の2号ことサオリちゃんです。
このゲーム作り始めたきっかけは「インド人の少女（お金で買った女の子）」の都市伝説を見て「それなんてエロゲ？」とか思ったことなので、それ考えるとメインヒロインその1でいいのかもしれないが不思議。

ちなみに家事全般は割と得意だけど、料理は全てカレー味。晃のために沙織から日本の料理を習ったりもするんだけど、そのとき瓶入りカレー粉に出会ってしまい、それを喜んで料理に使うので、晃は毎朝カレー味の厚焼き卵焼きとかカレー味の塩鮭とかカレー味の納豆を食べさせられるわけですが、でも食べてみると何故か美味しいのが不思議。

ちなみに何故名前が『サオリ』なのかというと、インドで晃が『買った』後に「名前をつけて下さい」と言われて、つい最初に思いついた沙織の名前を言ってしまったからなのですが、それでまた後々めんどくさいことになったりならなかったり。

「どうですか、痛くないですか？」

「ああ、うん。大丈夫だ」

彼の返事を聞いて安心したのか、サオリは耳掃除を再開する。

突然「耳掃除させて下さい」と言われたときは何事かと思ったし確かに恥ずかしいが、やって貰うとなんというかくすぐったい。

まあ考えてみれば美少女に耳掃除して貰うというのは、他人には羨ましがられるシチュエーションだろう。

「でも、どうしてまた急にこんなことを？ しかも部屋で」

そう、それだけがわからなかった。家でやるなら俺だってあそこまで拒否しなかっただろうに。

「ああ、それはですね」

「それは私が説明しよう」

サオリが俺の問いに答えようとした瞬間、部屋のドアがぱんって感じで開かれた。なんかこのドア、毎回こんな開け方ばかりされてるような気がする。

「って、鮫島さん？」

「いや、焦らない焦らない。耳掃除中に暴れちゃいかんよ？」

「ええと、その」

「じゃあ、理由を説明しようか」

「ああ、はい。お願いします」

色々言いたいことはあるけど、鮫島さんに何言っても無駄なのは都市伝説研に限らずウチの大学では常識なので、とりあえず素直に説明を聞くことにする。

そんな会話をしてる間もサオリの耳掃除は続いているので妙な気分だが。

「サオリ君、取れたかね」

「はい、だいぶ綺麗になりました」

そう言ってサオリは俺の耳から取った耳垢をつんだティッシュを手に取りながらそんなことを言った。

「いやその、だから理由を」

「ああ、そうだったね」

俺に言われて初めて気づいたといわんばかりに、鮫島さんは大仰に驚いてから口を開いた。

「北路君は聞いたことがないかい？ 『耳垢が落ちてる人は力加がひどい』と『どっせい！』」

鮫島さんが全て言い終わる前に、マイ耳垢が包まれたティッシュをサオリから奪い取ってゴミ箱にたたき込んだ。

「何をするんだね、人の話が終わらないうちに」

「聞かなくてもわかります！ それで俺の耳垢を綺麗したらどうする気だったんですか！」

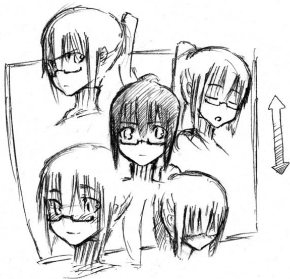
「それは勿論君の脇の臭いを」

「臭くな！」

「臭いんですか？」

「聞くな！」





「それで、今日もあなたが
代理というわけですか」

サークル管理委員所属で、活動が不明瞭きわまりない都市伝説研を
目の敵にしているキツめの美人。

都市伝説研には恐怖の鯨島さんがいるため、委員長をはじめとして
委員会の誰も動こうとしないのでしびれを切らして一人で動いている。

勿論、出頭して書類書かされたり報告させられるのは北路君である。

実は超少女趣味で中身は乙女だったりするのだが、人前ではそんな
姿を見せようとはしない。コーヒーのブラックを我慢して飲むタイプ。

マッドガッサー

窓笠 海鈴

Kairi Madogasa

身長 : 176cm
 体重 : 56kg
 誕生日 : 1月10日
 3サイズ : 88/55/86
 好きな物 : 烏、甘い物、
 可愛い物
 嫌いな物 : 無駄、
 はっきりしない人
 所属 : 成城大学3年
 サークル管理委員





多分世界初、萌えマッドガッサーの窓笠さんです。

このゲームの企画が決まったときに自宅にあった資料を漁り、某RPGの攻略本見たらマッドガッサーの話が書いてあって、気がついたらヒロインになっていました。

「マッドガッサー＝黒ずくめの男で、甘い匂いをするガスを巻き散らす怪人」らしいので「普段着ている服は黒い男物」「背は主人公より高い」「甘い匂いを漂わせている＝甘い物が大好き＝実は乙女」という感じになって、気がついてみると一番の萌え担当と大評判。

甘い匂いと言っても本当に微かなので誰も気づかないわけですが、サオリがカレー味の料理しか作らないために甘い匂いに敏感になった筈に気づかれて、そこから段々仮面がはがれていくという。

スタッフ内部で巨乳にするかナイチチにするかでかなり揉めたんだけど、結局巨乳に。俺はナイチチ派だったのに。ちっ。

ちなみに一番のお気に入りキャラなので、今後色々優遇されると思われます（最悪だ）

「すいません、車に入れて貰っちゃって」
「北路くんを遅くまで残せたのは私ですから」

「……」

「……」

いかん、話が続かない。

いやまあ確かに前と比べたら窓笠さんとは仲良くなれたと思うんだけど、こうやって二人きりになったりするとやっぱりりどうも。

何か話題は、話題になるものは……

別に無理に話さなくてもいいのかもしれないけど、このまま無言で二人寄り添って歩くとか無理である。主に俺が。だって窓笠さん俺と背の高さ同じぐらいだから横を見ると窓笠さんの整った顔が間近に見えるから——って、ダメ！見てたらダメ！話題を探さない！

「あ」

苦し紛れにあらこち見回したら、目についた。

「何ですか？」

俺の声を聞いて、窓笠さんが不審そうにこっちを見つめている。

「可愛いアグセサリーですね」

「……え？」

「いやこの車の柄の。カルガモですか？」

「ええと、その……」

あれ、どうしたんだろう。 なんだか窓笠さんむこう向いちゃったけど。

いやそんなことを気にするより先に、話を続けなさい！

「で、でも意外ですね！ 窓笠さん、こういうアグセサリーとかつけないと思ってたから」

「……ですか？」

「え？」

「変、ですか？」

「いや、そんなことは」

「……でも北路くん、変な顔してました」

「そ、それはですね」

いやまあ確かにそれはそうかもしれないけど、それは窓笠さんが言うような理由ではなく。

「なんですか？」

そして窓笠さんが不機嫌そうに俺を睨んできたりと逆らえるわけがなく、そんなわけで俺は観念して口を開く。

「可愛いな」って思ってた

死ぬほど恥ずかしかったのでそう言ってそっぽを向いてみたりしたけど、窓笠さんからの反応はない。

「……窓笠さん？」

さすがに耐えられなくなったので、覚悟を決めて窓笠さんの背に付き直る。

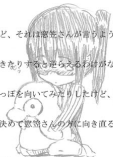
そしてそこにいた窓笠さんは。

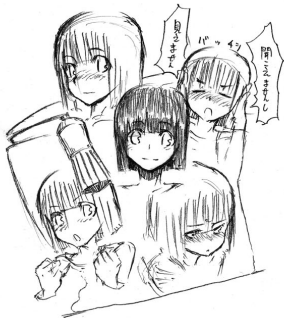
「顔、真っ赤、ですよ？」

「……っ」

思わず指摘したら、窓笠さんはより一層赤くなった。

それはもう『ぽっ』とか音が出そうなほどに。





「わたしを、先輩の……
トイレにしてください」

成城大学サークル棟トイレの主。

可愛い系でプロポーションもいいし明るい娘なので人気は高い娘なんだけど、主な持ち物は便所タワシとサン〇ール。

元々は鬼に「名前だけ貸して」って感じで都市伝説研に入ったんだけど、活動には割とまじめに参加している。

何故彼女が男子トイレにこだわるのか、それはシナリオ後半で明かされるかもしれません。明かされないかもしれません。

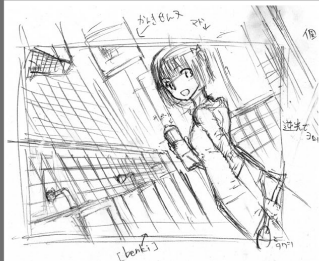
トイレの花子さん

河谷 花子

Hanako Kaway

身長 : 156cm
 体重 : 47kg
 誕生日 : 4月2日
 3サイズ : 88/57/89
 好きな物 : 掃除、綺麗な景色
 学校 :
 嫌いな物 : 汚れ、牛乳
 所属 : 成城大学1年
 都市伝説研究会





はい、多分今作一番話題になってる人、花子さんです。
最初は元気系の後輩キャラで、わりと癒し担当になるはずだったんだけどなあ……。

「トイレの花子さんが出るエロゲなんだから、おもしろいぐらいはありなんじゃね？」とか思ったのが間違いだった気がしなくもない。

まあでも世間に『萌えキャラ花子さん』は結構いるけど、ここまでトイレを前面に押し出したゲームはないと思うのである意味正解だったのかも。

ちなみに一枚絵のあるイベントは8割トイレの予定です。
もちろんエロシーンもほぼ全てトイレ。エロ担当キャラがそんなんばっかだとユーザの人たちが引きそうだけど、もう今更戻れない太陽の牙Oグラム。

ちなみに花子のキャラ担当であるところのチョモラン君は大学で一生懸命トイレの観察してるそうです。頑張れ。

あと、さすがに大きい方のシーンとかはないのでご安心下さい。

「いかん、漏れる！！」

なんとか限界ギリギリのところまで安眠の地にたどり着いた。

そして扉を壊破らんばかりに開けて楽園に駆け込むと、そこには――

「あ、先輩こんにちは」

一人の少女がいた。

いや別に少女っていうわけじゃないが、印象的に。

「よ、よお花子、久しぶり」

「あ、先輩ひよっとして使いますか？」

「あ、ああ。悪いな、せっかく綺麗にしたばっかなのに」

「いえいえ、トイレは使われなきゃ意味がありませんから」

「そ、そうか」

相変わらず花子理論はよくわからないけど、今はそんなことを気にしている場合じゃない。ないのだが。

「花子？」

「なんですか？」

「俺、今からトイレ使うんだけど」

「はい、どうぞ遠慮なさらず」

「いやそんな『どうぞどうぞ』って感じで手を出して促されまして」

「トイレの汚れはこびりつく前に落とすのが基本ですから」

「で？」

「ですから、先輩のトイレが終わった瞬間に掃除するのが最も効率的かと」

「いや、言ってることは正しいかもしれないけどさすがに女性の前ですというのほちょっと」

「あ、すみません。これは気がつきませんで」

「ああ、わかってくれればいいんだ――って花子、何してるんだ？」

「わたしは目をつぶって耳もふさいでますから、気になさらず、さあ！」

「そういう問題じゃねえ！」

「わたしには何も聞こえませんが見えません！ さあ、思う存分！」

「いやダメだって！ すぐ終わるからちよっと外で待っててくれれば――」

「大丈夫です。先輩の音がなんだか凄く奇妙な音だったりしてもわたし誰にも言いませんから！」

「そんな音はしねえって言うかお前全然聞こえてるじゃねえか！」

「お気になさらず！ それより先輩、我慢は体に毒ですから、さあ！」

「いやでもやっぱり、でも確かにそろそろ限界――」

「さあ！」

「アッ――」

(しばらくお待ち下さい)

5分後、俺は涙をふきながらトイレを後にしていた。

「えぐっ、えぐっ……何か汚された気がするよう」

「我慢するからです。それにどこにも飛んだりしてませんよ？」

「うっさいわい！ そんなこと言ってるんじゃないわ！」

「それでは先輩、またのお越しをー」

「おかしい！ 前から思ってたけどお前絶対おかしいよ！」



鮫島事件

鮫島さん

The Samejima

「はっはっは、さすが北路君だ」

都市伝説研究会会長で、「成城大学最大の謎にして禁忌」と呼ばれた
り呼ばれなかったりする謎の人。私生活は勿論、いつから在籍してる
のか、そもそも学生なのか、そして年齢も性別だって不明である。

なぜか晃が大のお気に入りで、色々無理難題をふっかけて楽しんで
いる節がある（そして都市伝説研のメンバーは巻き込まれる）

大学の内外を問わず色々なことを知っていて謎の人脈を持っている
ので、どうしようもないやっかい事があると鮫島さんを頼って来る人
もいたりする。まあ実際動くのは都市伝説研のメンバーなのだが。

カシマレイコ

鹿島 礼子

Reiko Kashima

「晃くん……もぎますよ？」

沙織の姉。晃にとっては「近所のお姉さん」で、子供の頃は憧れた
りしていた。妹と違って胸おっきいし。

趣味はコスプレ。する方もさせる方も両方いけて、最近はやサオリに
着せ替えてもらうのが楽しみらしい。サオリとしてはいろんな服を
着てて嬉しいようです。

普段は優しいお姉さんだが、怒ると超怖い。

昔は名神高速あたりでぶいぶい言わせていたと言う噂もあるが、定
かではない。

主人公

北路 晃

Akira Hokuro

身長 : 172cm
体重 : 61kg
誕生日 : 11月2日
3サイズ : -/-/-
好きな物 : カレー、
ジャンクフード
嫌いな物 : トマト、数学、
計画立てた行動
所属 : 成城大学2年
都市伝説研究会

「すいません、
マジ勘弁して下さい」

本作の主人公。基本的にお調子者でノリとか衝動に任せて行動する
ので、大抵あとで大変なことになって沙織あたりに怒られることに。

そんなわけで今回は衝動的にインドに行って、少女を衝動買いして
きて沙織にぶっ飛ばされました。てへ（プロローグ参照）

周囲からは「どうしようもないヤツ」とか思われてる反面、裏表が
ない性格なので周囲の人々にはわりと好かれている。

ちなみに名前は「folklore killer（都市伝説殺し）」の語呂合わせ。
もちろん殺すというのは（性的な意味で）という注釈がつく。

あとがきっぽいもの

「インド人の少女」の都市伝説を見て「これなんてエログ？」って思ってから約二ヶ月。まさかこんな本出すことになるとは、誰がびっくりって俺がびっくりである。

つうか、mixiに思いつきを書き散らしたら凄まじく食いつかれてさらにびっくり。苦勞すると思ってた絵描きも何故か向こうから突っ込んできたので捕まえ、メッセンジャーで固りと話し合ってたらこんなことに。でもまあとりあえず、協力してくれた人や応援してくれた人に感謝の言葉を。ありがとう。

なんか考えるのが楽しくてしょうがないことですし、まだしばらく色々やり続けるんじゃないかと。

ぶっちゃけ身内以外でこの本買ってる人はごく少数だと思いますが、もしこれを読んで興味がわいたとか言う奇特な方がいらっしゃいましたら、mixiで「都市伝説エログ妄想」ってコミュニティで色々やりますんで、ROM目的でもいいので入っていただけると幸い。

mixi入ってない人でも、この本読んで興味わいた人だったら下のメールアドレスにこっそり連絡くれれば招待しますので。

それでは、次は夏コミかひょっとしたら春あたりにどっかほかのイベントになるのかなあ。その時にはコピー誌じゃなくもうちょっと気合い入れて、サブキャラとか舞台とかの設定も入れた設定資料集をオフセットで出したいものであります。

……反響少なかったらケツまくるかもしれませんが。

まあ何はともあれ、とりあえずこんなところで。また次の本でお会いできますように。

※. 今のところゲーム化の予定はありません。むしろそのゲーム自体が都市伝説になる勢いで。

Windows用ゲーム「都市伝説」妄想設定資料集 01

発行日 : 2007年12月31日

発行 : 裸Yシャツ友の会・都市伝説エログ制作委員会

イラスト

沙織&サオリ : そばかす。

窓笠&花子 : チョモラン

その他 : 右近 (e-mail : u-kon@hada-Y.com)

印刷 : 多分キンコース



※本シーンは没シーンであり、こんなイベントはありません。多分。